

診断や治療の基礎を担う という自覚のもと、 検体検査に向き合う

迫屋さんは臨床検査技師として、日々たくさんの検体と向き合っています。いつも胸にあるのは確実かつ迅速に検査して、医師の診断や患者さんの治療に役立とうという使命感と情熱です。

臨床検査技師 迫屋 舞さん



さこや・まい ●1990年、鹿児島県生まれ。高校生のときに将来は臨床検査技師になろうと考え、臨床検査技術を学べる大学に進学。大学4年生のときに臨床検査技師国家試験に合格する。現在、東邦大学医療センター大森病院臨床検査部臨床検査技師。

臨床検査技師について調べ、 自分に向いていると判断

——なぜ臨床検査技師という職業に就こうと思われたのですか。

迫屋 高校生のとき、今後の進路について思いを巡らし、いろいろな情報を集めていました。そうしたなかで、将来は医療関係の仕事に就きたいと思うようになりました。私の周囲でも看護師など医療系の職業に就こうと考えていた女子は少なくありませんでしたね。おそらく資格を取得して仕事に就きたいと思っていたのではないのでしょうか。

私は、数ある医療系の仕事のなかでも臨床検査技師に向いているのではと

思いました。よく調べてみると、一口に臨床検査技師といっても、検体検査や生理機能検査など異なる分野があり、それぞれ検査する項目も多岐にわたることがわかりました。それで臨床検査について大学で勉強しつつ、自分が向いている分野を見極めることができるのではないかと考えたのです。

——それで臨床検査について学べる大学を選んだのですか。自分が抱いていたイメージと大学での講義や実習とは、隔たりのようなものはありませんでしたか。

迫屋 大学の講義や実習で学ぶことがたくさんあって、正直大変でした。でも、自分が抱いていたイメージとそれほど大きなギャップは感じませんでした。ほぼイメージ通りだったといえるかもしれません。

ただ、大学に入って臨床検査技師にはほんとうにいろいろな分野、さまざまな仕事があるのだなと改めて知りました。そんななかで臨床検査技師を目指し、私なりに一生懸命に勉強しました。大学4年の2月に臨床検査技師国家試験を受験、3月に資格を取得しました。

自分の検査した検体のデータが 診断や治療の基礎となる

——迫屋さんは現在、どんな仕事をさ

れているのですか。

迫屋 私は臨床検査部で検体検査を担当しています。たとえば採血された血液を測定器にかけて、タンパク質や酵素、電解質などの数値を測り、データとして医師や看護師に伝えるのです。これらは通常の検診でも測定する検査です。ほかにもガンの診断に大切な腫瘍マーカーなどの検査を行うこともあります。

臨床検査技師には、検体系のほかに生理機能検査や病理検査などがあります。採血を行うこともあります。心電図や脳波の測定、呼吸機能や超音波などの検査を行う生理機能検査や採血を行う際には、直接患者さんと接する機会もあります。

——検体系の臨床検査技師の役割というの、縁の下の力持ちのようなところがあって、なかなか一般の人からは見えにくいですね。そんなお仕事でやりがいを感じるのはどんなときでしょうか。

迫屋 たしかに検体系の臨床検査技師の仕事は裏方的なところがあります。私が担当している検体系の場合、臨床検査技師が患者さんとかかわることはほとんどありません。それでも私の検査した検体のデータが医師の診断や患者さんの治療に役立っていると実感したときは、大きなやりがいを感じます。それは私に限らず、多くの臨床検査技

▼糖分析装置

検体となる血液や尿などのグルコース（ブドウ糖）の濃度（血糖値）を測定する。



▲血液ガス分析装置

呼吸機能や代謝機能に異常がないか、血液のなかに溶けている酸素や二酸化炭素など血液ガスの濃度を分析する。



▲生化学自動分析装置

血液や尿などに含まれる糖やコレステロール、タンパク、酵素などの測定を行う。

さまざまな分析機器を駆使して、診断や治療の基礎となるデータを抽出し、すみやかに医師や看護師に伝える。

師が、そこに自分の仕事の意味を見出しているのではないのでしょうか。診断や治療の基礎を担っているという自負があります。

——お仕事の難しさや大変さを感じるのとはどんなときですか。

迫屋 検査する検体数が多いということもあって、患者さんだけじゃなく、医師や看護師と直接向き合ってやりとりすることがあまりありません。そのため患者さんの生活環境など、隅々まで知って検査し、データを医師や看護師に伝えるということがなかなかできません。そこが少し心残りですね。

確実に検体を検査し 迅速にデータを伝える

——お仕事では、どんなことを心がけていらっしやいますか。

迫屋 やはり送られてきた検体をしっかりと検査し、正確なデータを出して少しでも早く医師や看護師に伝えるということですね。そのデータはどんな病気を診断したり、治療方法を考えたりするときのベースとなるものからです。

——臨床検査技師というと、一人で検体に向かってコツコツと仕事をすると、というようなイメージがあります。しかし近年は、臨床検査技師の仕事においてもチーム医療の重要性が指摘されて

いるようですね。

迫屋 はい。チーム医療は医師を中心にして看護師や薬剤師、臨床検査技師、栄養士など医療に関係するスタッフが協力し合って、一人ひとりの患者さんを治療するということです。チーム医療では、それぞれの分野の専門家が専門的な知識を持ち寄ることで、より有効な治療を行うことができます。そこでは臨床検査技師も検査をするだけではなく、ほかの医療スタッフとコミュニケーションを図り、よりよい治療を目指すのです。

——臨床検査技師にはどんな資質や自覚が必要なのでしょう。

迫屋 当然ですが、根底には自分の仕事は患者さんの命にかかわることがあるんだという強い使命感と自覚がなければなりません。それを前提として、私が担当する検体系でいえば、検査する検体数がとても多いので、ときばきと確実に検査をする手際の上さが求められます。手際よく検査をしなければ、それだけ診断や治療が遅れてしまいますから。もちろんそこにミスがあってはなりません。迅速かつ確実に仕事をやる能力が求められるということでしょう。根気強さや集中力も必要ですね。私たちの仕事は細かい作業の連続ですから。

また注意深さも大切ですね。たとえば同じ患者さんでも、再び検査すると

以前と比べ数値が異常に上がっている場合があります。その原因は測定器の不具合など測定する側にあるのか、あるいは病気によるものなのかを見極めなければなりません。そんなときは自分なりにいろいろな可能性を考え、上司とも相談して原因を突き止めます。場合によっては再検査することもあります。

——先輩としてこれから臨床検査技師を目指す後輩に対してアドバイスをいただけますか。

迫屋 できるだけいろいろな経験を積んでほしいと思います。先ほど申し上げたようにチーム医療の大切さが指摘されている現在、コミュニケーション力や情報の発信力が求められます。とくに生理機能系の臨床検査技師の場合は、患者さんと直接かわるので、コミュニケーション力はとても重要です。

コミュニケーション力や発信力は専門的な分野の勉強だけではなく、さまざまな経験のなかで培われるものではないのでしょうか。いろいろな経験を積みめば視野の広さも養われます。広い視野で多角的なものごとを見ることが、チーム医療には大切だと思います。もともとコミュニケーション力や発信力は臨床検査技師だけではなく、どんな仕事にも必要なものかもしれませんね。